

入選

わすれたくない始まり

アメリカ 中部テネシー日本語補習校 小学部 3年 袴田 明日香

あのとき私は、アメリカに来たばかりで、お友達がいませんでした。えい語もわかりませんでした。そんな私でも、スクールバスに一人で乗らなければいけませんでした。だから、毎日泣いていました。さみしくて、こわくて泣いていました。

そんなとき、教室に入ってすわっていたら、となりのせきの女の子が、

「Do you need a friend?」

と話しかけてくれました。その子の名前はライレンです。「friend」だけは意味がわかったので、うなずきました。それからは、休み時間もランチのときも、いつもいっしょにいてくれました。先生のお話がわからないときは、こっそりノートを見せて、にこっとしてくれました。

ライレンは、スクールバスも同じだったので、ずうっといっしょにいてくれました。そのおかげで、学校がこわくなくなって、なかなくなりました。

ライレンは、自分のお友だちに私をしょうかいしてくれて、私のお友達がふえました。それでもえい語をしゃべらずに、ジェスチャーだけで答えていたら、ある日ライレンが、しゃべらない私を見て、さみしそうな顔をしました。

それを見たとき、私はしゃべったほうがいいと思いました。それから、えい語をしゃべり始めました。そうしたら、ライレンがうれしそうな顔をしたので、私もうれしくなりました。それから、えい語がどんどんわかるようになりました。

私が、アメリカに来て一年半でライレンがひっこすことになりました。ひっこす前の日に、いっしょに遊びました。そのときに、「フレンドシップブレスレット」をいっしょに作りました。

ライレンがいなかったら、私はまだ泣いていたかもしれません。ブレスレットは、私のたから物です。いつか私も、ライレンみたいに、だれかにやさしく話しかけてあげられるようになりたいです。